大崎治部著

助けの船



THE LIFEBOAT AND OTHER STORIES

大崎治部著

助けの船

教文館出版部

教文館の事業は、日本の基督信徒及び未だ基督教を信ぜざる人々の諸要に適したる基督教文學の著作及頒布にあり。本館は日本に在る基督教ミッションの同盟を代表せるが故に公同的精神を以て立てるものなり。されば本館の會員及び維持者は必ずしも本館に於て發行せる書籍に現はれたるすべての意見に同意せるものと認むべからず。



はしがき

『お父さん、お母さん、お父さん、お母さん』

朝から晩まで私達は呼びつゞけてゐます。いくら呼んでみても少しも嫌になりません。呼べば呼ぶほど、大好きになつて來ます。それは、お父さんとお母さんとが眞心こめて、私達を可愛いがつて下さるからです。

『神樣、神樣、わたしの神樣』

神樣は絶えず私達をまもつてゐて下さいます。いつも可愛いがつて下さいます。そして、どのやうな時にでも私達を助けて下さいます。

神樣と、お父さんやお母さんの助けがなくては、私達は立派な、情深い人にはなれないのです。けれど、助けられるばかりではいけません。氣の毒な人々を助けること

が、助けられる事よりも、もつと大切なことなんです。人々のために、『助けの船』となつて人々を助けてあげるのが、一番大切な事なんです。神様や、お父さんやお母さんは私達の『助けの船』です。私達はその御恩返しとしてお友達のために、氣の毒な人々のために、喜び勇んで『助けの船』にならうではありませんか。私達の一人一人が『助けの船』になつたら、神様や、お父さんやお母さんや、氣の毒な人々がどんなにお喜びになるでせう。さあ、元氣を出して一生懸命に『助けの船』になりませう。

一九二八年十一月三日初めての明治節の日

大崎治部

――柏木にて――

暴風雨の朝

三吉が眼をさました時、お父さんはゐなかつた。急に用事が出來たので、大急ぎに町へ出かけて行つたのだよ、とお母さんから聽かされた時、何んだか淋しい物足りない心地がした。

「お土産があるんだとさ、おとなしくして待つておいでよ」

お母さんがかう云つた時、三吉は急に嬉しくなつた。眼の前に、お父さんが買つて來てくださつたお土産が、はつきり見えるやうに思はれた。

「お父さんが早く歸るといゝな、どんなお土産だらうな……」

こんな獨語を洩らしながら、元氣よく村の小學校へ歩いて行く時には、早や、溫かい朝の太陽が輝いてゐた。

三吉の村は、海岸にある小さな貧しい村だつた。村に住んでゐる人達は、遠い沖の方まで船を漕いで行つて、魚をとる漁師ばかりだつた。丈夫さうな、銅色をした身體の漁師達の、愉快さうな笑聲がいつでも盛んに聽えてゐる小さい村だつた。

「僕は早くあんな人と一緒に沖へ行きたいな」

三吉の小さい胸の裡には、大きな荒浪を乘り切つて行く、お父さん達の姿が常に浮び上つてゐた。それほど、三吉は海を愛し、

海の彼方にあこがれてゐたのである。
三吉が、學校から歸つて來る少し前から、妙に空模樣が變り出して來た。
「おや、變だぞ。沖を見ろ。あの恐ろしい暴風雨の雲はどうだい、物凄いぞ」
三吉は急いで學校から戻つて來た。すると間もなく雨が降り出した。
「お母さん、お父さんはどうでせうね。雨にお困りにはならないでせうか？」
「大丈夫だよ。心配しなくたつてね」

「けれど、峠を越すんだから大變でせう。それに、もう陽も暮れるんですから………」

お母さんと三吉とは、小さい窓から空模樣を、ぢつと眺めてゐたが、次第に灰色の雲が沖の方からやつて來た。矢のやうに。

「大變なことにならねばよいが」

三吉は、まるでつぶやくやうに獨語を洩らしてゐた。

陽が暮れるにつれて、雨は烈しく降つて來た。その上風さへ吹き出したのか、浪の荒れる音が、次第に高まつて行つた。

「お母さん、お父さんは大丈夫でせうか。海の音を聽いてごらんなさい」

「…………」

お母さんと三吉とは、ぢつと息を止めて、四つの耳をそば立てた。がう、がう、がう…………

海は益々荒れて來るやうだつた。何んだか沖の方から、恐ろしい悪魔の乗つてゐる船が、一目散にかけつけて來るやうな不安に、親子の者は襲はれた。

「若しかしたら………」ふと、三吉は身體を震はせた。間もなく、三吉とお母さんとの淋しい夕御飯が濟むと、三吉はその日の復習にとりかゝつた。

ちん、ちん、ちん——時計がなり出した、

「おや、もう九時だ。今夜はお父さんは戻らないね」
と呼びかけた三吉の言葉には、力がなかつた。
「きつと、伯父さんの家へお泊りになつたんでせう。淋しいから今夜は、早く寢ようね。神樣にお祈りをしてから」
薄暗い電燈の下で、お母さんは三吉の着物を縫つてゐた。
「おや、何んだらう。濱が騷がしさうだ。どうしたんだらう」
三吉は、つと立ち上つてそつと小さい窓をあけて、外の方を見ようとした。
三吉は急いで立ち上ると、そつと小さい窓をあけてみた。けれど雨が烈しく吹き込んで來るので、すぐ閉めなければならなかつた。

「お母さん、なんでせう……あ、人の聲がする。叫び聲だ」
三吉の顏の色はさつと變つた。
「僕、一寸行つて見て來ます」
「氣をつけて行くんだよ。いゝかい」
三吉はあわてながら外套を着てしまふと、飛ぶやうにして家の外へ驅け出して行つた。海岸は眞暗闇。
「おーい。みんな來い。おーい。集つて來い」
かういつた叫び聲が、海岸のあちらからもこちらからも、盛んに聽えて來た。何んだか、喚きながら走つて行く人々もあつた。
急にあたりが騷々しくなつて行つた。

「なんだか知らないが、大變なことがおこつたに相違ないぞ」
三吉は、もうぢつとしてはをられない。人々の驅けて行く方へと走つて行つた。そこには、多勢の村人が集つてゐた。かがり火が盛んに音を立てながら燃えてゐた。
「をぢさん、どうしたの」
「お前さん、沖を見ろよ。船が難船して、沈みかけてゐるんだ」
「え………」
三吉は思はず沖の方を見た。沖には、赤い光が消えたりあらはれたりしてゐた。
「難船だ。どうしよう………」

と、つぶやいた三吉は、息をもつかずに自分の家へ戻つて來た。
「大變です。お母さん。船が沈みかけてゐるんです。今、村の救助船がおろされかけてるんです。お父さんはどうしたんでせう。村の人は、お父さんを呼んでゐるんです」
「そりや大變だね。お父さんはまだお歸りにならないんだが………」
「お母さん、僕、もう一度みんなの處へ行つて來ます」
かういつた三吉は、再度勢よく出かけて行つた。
「おい、三吉。お前さんのお父さんはどうしたんだい？」
と訊ねたのは、救助船に乘り込む村人の一人だつた。
「お父さんは、町へ行つて留守なんです」

「留守だ？そいつは困つたな」

「をぢさん、何が困るんです」

「お前さんのお父さんがゐないと救助船に乗り込む人數が足りなくて、救助船が出せないんだ」

「救助船が出せないんだつて？」

自分のお父さんが一人ゐないために、大切な救助船が出せない、——といふことを、眼の前に聽かされた三吉は、その一言がぐつと胸にこたへた。

「お父さんさへいらしつたら……」

こんな事を思つてみても、今更どうすることも出來ない

風は吹く。雨は頻りに降つて來る。海は、惡魔のやうな唸り聲を立てゝ荒れすさんでゐる。然し、救助船はなかなか出さうにもない。それは、三吉の父に代る人がゐないので。

暫くの間、三吉は靜かに考へ込んでゐた。何んだか眼をつむりながら、祈つてゐるやうな樣子をして。が、三吉の愛に燃えた血潮は躍り立つてゐた。

「をぢさん。お父さんの代りに僕が行きます」

と、突然、三吉は叫ぶやうにたのみ込んだ。三吉の小さい瞳は、堅い決心と覺悟とに輝いてゐた。

「えツ、お前のやうな子供が行けるもんか。この浪の荒いのに」

「大丈夫です。僕、一生懸命に漕ぎます。きつと、やつてみせますから」

「お前は子供だから駄目だ。それより、そのかがり火を消さないやうに燃やしておくれ」

「をぢさん、是非、僕をつれて行つてください。きつと、あの人達を救つてあげますから。さあ、僕を……」

三吉は一生懸命になつて頼み込んだ。その烈しい熱心に、流石の村人も全く驚かされてしまつた。

「をぢさん。さあ、早く救助船を出さねば大變です。船が沈んで、人が死んぢまひます。僕のこの力で……」

三吉は、滿身の勇を振つて救助船を無理にも押し出さうとした。

「あツ、危い………」

村人が、思はず手に汗を握つて叫んだその時、三吉と十一人の村人を乘せた救助船は岸を離れた。

「そら。しつかり漕ぐんだぞツ」

「さあ、一生懸命にやるんだ。もう船まで近いぞ」

「なに糞ツ一人だつて溺れ死させてたまるもんか」

難船して、沈みかけてゐる汽船の救助に向つた救助船の人々は、力のかぎりを盡して漕いだ。然し小さい救助船は木の葉のやうに、恐ろしい荒浪にもまれた。ともすれば海の水がはいつて沈みかけ

た。
「神様、助けて下さい。僕達は一生懸命です」
お父さんの代りに、救助船へ無理矢理に乘り込んだ少年の三吉は夢中になつて漕いだ。眼を閉ぢ、齒を喰ひしばりながら。小さい三吉の身體から、眼に見えるやうな大きな力が湧き溢れてゐた
「もう少しだ。さあ、生命がけで漕ぐんだぞ」
救助船に乘つてゐる村人は、心を合し、力を合して氣違のやうに漕いでゐた。
「おうい。助けてくれ――。おーい。おーい」
眞暗闇の中から、物凄い叫び聲が絶え間なく聽えて來る。

「おーーい、今、行くぞーー。行くぞーー」

救助船の人々は、お互に勵ましながら船を漕いでゐたが、仲々汽船に近寄れない。海の底へでも吸ひ込まれさうになるかと思ふと、急に、高い浪頭の上まで舞ひ上げられ、左に右に、前に後にゆれて救助船が沈みさうになる。

「神樣、あの船の人々を助けて下さい。お願ひですから」

三吉は、兩方の手に握りしめてゐるオールを動かしながら、眞心をこめて神樣に祈つてゐた。

やつとの思ひで、救助船は沈沒しかけてゐる汽船に近づくことが出來た。

「おい、早くしろ。さあ、飛び移るんだ。いいかい」

「氣をつけろ。浪にさらはれるな、生命がないぞ」

難船した船の人々は、救助船へと飛び移つた。

「もう、これだけかい………」

救助船の一人が大聲に叫んだ。その時、最早救助船は難破した汽船から離れようとしてゐた。

「あツ、あの檣の處に………」

かういつた三吉は、ひらりと難破船へ飛び乗つた。

「危いツ………」

人々が叫んだその時、山のやうな荒浪がやつて來て、救助船を

引きさらつた。
「おい、漕ぐんだ　漕がないと沈むぞツ」
救助船にゐる人々は一生懸命に漕ぎ出したが、誰れも三吉のことには氣が付かない。救助船は、難破船からずつと離れてしまつた。
三吉は甲板の上へ飛び上ると、檣の處へ驅けよつた。
「おい、君。しつかりし給へ。僕が來たから大丈夫だ」
檣にかぢりついてゐるのは、三吉と同じぐらゐの少年だつた。
三吉は驚いた。
「君、元氣を出し給へ。きつと助かるよ」

三吉は、その少年を抱くやうにかゝへると、急いで振り返つてみた。然し、救助船の影も形もなかつた。

「失敗つた。なに、死んでたまるもんか……」

と、元氣よく叫んだ三吉は、急いで周圍を見廻した。然し、自分達二人の生命を助けてくれるやうなものは、何一つない。船は次第に沈んで行く。浪は甲板の上までやつて來た。

「なに糞ツ負けないぞ。さあ力を出すんだ」

三吉は、その少年を抱くと、すぐ檣の上の方へと登り始めた。もう、夢中だつた。少年を助けたいといふ望に、三吉の全身が燃えてゐたから。やつとの思ひで、檣の上まで登りつめた。

「君。勇氣を出し給へ

三吉は自分の身體と少年の身體とを、檣についてあつた綱で、しつかり檣にくくりつけた。が、その最後の一刹那、大きな浪がやつて來た。

「あツ……」

ざざざ――、ざざざ――。山のやうな大浪の物凄い唸り聲が、三吉の耳にきこえたかと思ふと、浪の底の方へと引摺り込まれた

「なにツ……」

三吉は驚いた。ぐつと胸がつまつた。苦しくなつて來た。夢中になつて兩手を動かした。後足に力を一杯入れて勢よく浪をけつ

た。思はず二三度鹽からい海水を飮まされた。咽喉がつまつて息ができない。

無我夢中になつてもがいた。死物狂ひに身體を動かしてみた。突然、身體が輕くなつたかと思ふと、すツと冷たい息が兩方の鼻の穴からはいつて來た。

「うまいぞツ。浪の上へ出たんだ。おい、君、元氣を出し給へ」

三吉は浪の上へ頭を擡げて大聲にどなつた。その時、折れた檣の周圍に、自分と少年とが結びつかれてあるのに氣がついた。

「有難い、波の中へ引摺り込まれた時、波のために檣が折れたに違ひない」

三吉と少年とを結びつけた檣は大浪にさらはれ、まるで木ノ葉のやうに右へ、左へと流されてゐた。

おーい、おーい、助けてくれ。おーいッ

大浪にもまれながら聲の續くかぎり、三吉は叫んでゐた。身體中の聲をしぼつて叫んでゐた。何處を見ても眞暗闇。時々、大浪で上の方へほり上げられた時、ちらりと火が眼についた。それは岸で盛んに燃やしてゐるかゞり火であつた。

三吉は次第に疲れて來た。三吉の聲も弱つて來た。けれども風は吹いてゐる。浪は荒れ狂つてゐる。上へ、下へ、右へ、左へ、三吉と少年とは檣の動くがまゝに流れてゐた。

おーい、おーい、おーい。

三吉は、はツと思つた。急に元氣づいた。耳をそば立てゝみた。しかし三吉にはその呼び聲に答へる力は、最早なかつた。いくらもがいても聲が出なかつた。思はず、三吉の眼からは涙が出た。救助船に相違ない。自分達を助けに來た船だ、と、わかつてゐても答へられない。自分達のゐる場所を敎へる事ができない。三吉は全く疲れ果てた。

「あツ」

鹽からい海水をぐつと飮み込んだその時、三吉の身體の中の力が、一時にばツと拔けてしまつた。三吉と少年とは、全く死んだ

者のやうに浮いてゐるだけであつた。

× × × ×

「三吉、三吉」

三吉はふと眼をあけてみた。

「お、やつと生命は助かつたぞ。おい、三吉、わしの顔がわかるかい。わしだよ」

三吉は、まるで夢の中からさめたやうに、ぢつと周圍を見廻してゐた。

「さあ、しつかりしておくれ。もう安心してよいぞ」

三吉はその時まで誰が自分を呼んでゐるのか、わからなかつた

が、その時はつきりわかつた。

「あゝ、お父さんだ。」

「わしがわかつたかい。有難い。元氣を出しておくれ。」

父は、思はず喜しさうに涙を流した。

「どうして僕は助けられたんです。あの少年はどうしました。お父さんは、いつ戻つたの」

「お前と一緒に助けられた少年も、生命だけは無事に助かつたよ。お父さんはな、昨夜、急いで歸つて來た。處が、殘念なことにも沖の難波船を助けるための救助船が出た後だつた。その救助船の中に、お前が乘つてゐることきいた時、わしは氣違のやうに心配し

た。無事でお前が歸るやうにと神樣に祈つてゐた。間もなく救助船が戻つた。けれど、お前と少年とがゐない。さあ、大變だ。三吉を殺してなるものか。少年を助けに行けと又復救助船が出かけて行つた。今度は、わしは一番先頭に乘つて、浪の中を探し廻つた。有難いことにも、お前と少年とを結びつけた檣を見つけ出した。この時、船に乘つてゐた人達は、思はず萬歲を叫んで喜んだ。お前と少年とは早速この家へ運ばれ、昨夜から今まで村中の人々が熱心に介抱したんだよ。よく助かつてくれた。こんな嬉しい事はない」

父は三吉にわかりやすく物語つた。三吉は微笑みながら聽いて

ゐた。

「お父さん、難破船の人は皆助かりましたか」

「助かつたとも、船の人達は、お前が息を吹きかへすのを待つておいでぢや。もう、さつきから、どんなに喜んでをられるか知れないぞ。お前は、ほんとによい事をしてくれた」

三吉と少年の生命が無事に助かつたと云ふ事が、村中に知れ渡つた。助けられた人々も、村人も三吉の家へ集つて來た。そして、口口に三吉を褒めた。心から感謝してゐた。

「三吉は立派な少年だ。感心な少年だ。俺達の生命の恩人だ。あの三吉のためなら、なんでもして上る。勇敢な少年だ」

びっこの少年

可愛い少年が息を切らしながら家の中へ飛びこんで來ました。
「お母さん、お母さん。明日カペナウンへ連れて行つてくださいね。いいでせう」
「まあ、一寸、お待ち。そんなに息を切らしちや、お話が出來ないじやないの」
お母さんは笑ひながら、靜かになだめる樣に、抱きよせました。
少年はほつこ息をつきながら、愉快さうに眼を、輝かしてゐま

す。

「お母さん、今、エス様がカペナウンに來てゐらつしやるんですよ」

と、お母さんの膝にもたれてゐた少年は、話し始めました。

「明日、お友達がカペナウンへいらつしやるの。お母さん、僕達も行きませうね。

エス様が、此處にゐらした時、僕達に面白い遊戯を敎へて下さつたし、面白いお話を隨分して下さつた事を、お母さんは、憶えてゐるでせう。だから、逢ひに行きたくなつたの。

お母さん、僕はねエス様のにこ〳〵した顔を見てゐると、たま

らなく嬉しくなつて來るんです。ほんとに好きになつてしまつた。だから、エス樣のために、何かして上げたいやうな氣がするの」
「さう、お母さんは明日御用があつて、行けません。けれど、お友達と一緒に行くのであれば、行つてもよろしい」
「あゝ、僕、嬉しいな」
次の日、未だ、夜の明けない頃から、少年は用意のため嬉しさうに騷いでゐました。
カペナウンまでは道が遠いので、お晝のお辨當を持つて、出かけました。
けれど、夕御飯頃までには、とても歸れさうにもありません。

お陽様は輝いてゐます。樹の葉は心地好げに、ひら〳〵と、風にゆれ、小鳥は嬉しさうに囀つてゐます。

少年とそのお友達とは、面白さうに笑ひつゝ出かけました。

お友達は飛んだり、走つたりして、ふざけながら歩いてゐましたが、この少年の胸には絶えず、ある考へが浮んでゐました。

「僕は今、エス様の處へ行くのだ。何か仕事をして、僕がエス様を心から愛してゐると云ふ事をエス様に知らしたいものだ」

少年は自分の考へを、お友達には、少しも話しません。

若し、お友達に自分の考へを話すと、きつと、笑ふに相違ない

と思つてゐたからです。

少年には話す事が、耻かしいのです。

たうとう、カペナウンへ着きました。

けれど、湖の附近には、エス樣の姿もお弟子達の影もありません。少年達は非常に、失望しました。全くがつかりしてしまひました。

少年達はもう早步く元氣もないほどです。

少年達は樣々な思ひを、胸に描いて來たのですから、悲しみました。

湖の附近では、多勢の人々がエス樣を圍繞いて、お話を聽いてゐるに相違ないと、思ひ込んでゐたのです。

「どうしたのだらうね」
「だつて、ここにいらつしやると僕は確に聴いたよ」
「誰かに訊ねてみようぢやないか」
「それがいい」
少年の一人はカペナウンの人にエス様は何處へおいきになつたのかと訊ねました。
「エス様とそのお弟子達とは、ペテロのお船に乘つて、湖をお渡りになつた」
と、人々は答へました。これをきいた少年達はがつかりしました。
何うしたものだらう、と湖の上をはるかに見つめました。

少年達はエス様の跡を追つて、湖を渡らうと思つても、船がありません。

「どうしたら、いいのだらうね」

と、お互に顔を見合せつつ、考へこみました。

「お友達はエス様に逢はずにお家へ、歸りはしないだらうか」

と、この少年は心配しました。

そして、幾分、うろたへ氣味になつて、お友達の樣子を眺めてゐたのです。

然し、お友達は

「遠くはない、湖を廻つて行かうぢやないか。きつと、エス様に

もそのお弟子達にも逢へるよ」
と、口をそろへて云ひました。
少年の顔は喜びに、輝きました。
お友達は出發しました。途中で數人の人々に出逢ひました。この人々も矢張りエス様を捜しに行かうとしてゐたのです。
少年は歩きながら何氣なく、道の片隅を眺めました。
そこには跛の少年が羨ましさうな樣子で少年の方に向いて坐つてゐましたが、何んだか話したいやうな、樣子をしてゐました。
「今日は」
と、少年は情深い口調で、呼びかけました。

「君、何處へ行くの」
「僕、エス樣を捜しに行く處なんだ。君はエス樣が何處にいらつしやるか、知らないかね」
「あ、僕は知つてゐるよ。エス樣は湖の向ふ側にいらつしやる筈だ。今朝、ここまで、僕は、びつこを引きながら、エス樣について來たんだが、ここで、見失つたのさ」
「それは殘念だつたね。君は脚が惡いのに、なぜ、ついて來たの」
「誰れかゞ、僕に、エス樣に診ていただけばきつと癒るよと云つたからついて來たの。ほんとうに、僕の跛がなほるのかしら」
「…………」

跛の少年は殘念さうな顏付をして物語りました。

少年は默つて跛の少年を凝視めてゐましたが、急に強い決心の色が眼に現はれて來ました。

「確に癒るこも。エス樣はきつこ癒して下さるよ。エス樣は何んでもなさる人だこ云ふ事をちやんこ、僕は、知つてゐるんだ。僕達こ一緒に來給へ」

「だつて、僕は跛だから、遲くて駄目」

「心配しなくたつていいよ。僕が助けてあげる。途中で疲れたら僕がおんぶしてあげよう」

「有難う。僕、ほんこに嬉しい」

あまりの嬉しさに跛の少年は飛び上る樣にして立ち上りました。跛の少年は心から喜び勇んでゐます。この少年こ愉快さうにエス樣の話をして歩いて行きました。

跛の少年は絶えずその少年に助けられながら、歩いてゐました。ずゐぶん長い道です。

然し、少年達は湖を廻つて、遂に、エス樣を見出す事が出來ました。

多勢の人々がエス樣を圍繞いてゐます。その眞中に立つて、エス樣は色々のお話をしてゐました。

エス樣は朝から、晩まで眼の廻る程、お忙がしかつたのです。

病人を癒したり、跛を癒したり、盲目の眼を開けたりしてゐらつしやいました。

少年と跛の少年とは、多勢の人の中で、はぐれました。

「跛の少年は何處へ行つたのかしら」

と、少年は獨り小さい胸を痛めて心配してゐたのです。少年は心配しながらも、エス様のお話をきいてゐました。

もう、陽が暮れようとする時になりました。

「御覽なさい、僕は走れるよ」

と叫びながら、跛の少年が飛んで來ました。

「あ、なほつたね。ほんとによかつたね。僕も嬉しいよ。僕は、

君を見失つてから、心配ばかりしてゐたんだよ」

少年は自分の前に立つてゐる跛のなほつた少年の姿を見て、嬉しさのあまり涙さへ流してゐました。跛の少年の足は眞直に、癒つたのです。

少年と跛の少年とは、兄弟の樣に強く抱きあつて、エス樣に感謝しました。

「ほんとに有難う。もし、君に逢はなかつたら、僕はここへ來なかつたに相違ない。さあ、エス樣のなすつた事を、見てごらんなさい。こんな、嬉しい事はない」

と、跛の少年は幾度も、お禮を云ひました。そして、なほつた自

分の足を見せました。

エス樣をお助けしたいと朝から思ひ續けてゐた可愛い少年の望みが、やつと、果された時は、最早夕方です。

少年は人々の樣子を、眺めてゐました。

「もう、夕御飯でこの多勢の人も御飯を食べねばなりませんからこの人々を歸らして下さい」

と、お弟子達はエス樣に、お願ひしてゐます。

少年はこの聲を聽いて、自分のお腹の空いてゐるのを、急に、感じて來ました。

けれど、エス樣は

「この人々にも何にか食べさして上げるとよい」

と、ていねいに、おつしやいました。

「私達は自分の御飯しか持つてゐません。お金があつても、この様に多勢の人々の御飯を賣つてゐる家はこの處にはありません」

と、お弟子達は答へてゐます。

恰度その日の夕方、おそく、少年はお母さんと、家で話してゐました。

「お母さん、エス様は大變な事をして見せて下さつたの。恰度そこには、五千人程の人が集つてゐたのです。

處が、お母さん、エス様は人々の持つてゐる食物を集めて來いと、おつしやいました。僕はお晝のお辨當の殘つたのを一つお弟子の籠の中へ入れました。

エス様の前に集つたのは、五つのパンと二つの小さい魚です。早速、お弟子に人々を草の上に坐らせる様にと、お命じになつてからその五つのパンと二つの小さい魚とを、兩手に捧げました。そして、天の神様に感謝してゐらつしやつた様です。

それから、それをおさきになつたのですが、それを、ペテロの籠にも、ヨハネの籠にもアンデレの籠にも、ヤコブの籠にもお入れになつたの。

お弟子達はそれを幾度も幾度も籠に入れて多勢の人々に配りましたが、少し餘つたのです。僕のお辨當よりも澤山餘りました。まあ、何んと不思議な事なんでせう。どうして、そんな事が出來ると、お母さんは思つて」

と、息をもつがずに、喋舌り立てました。

お母さんは少年の肩に兩手をおいて、抱きよせました。そして

「それは、エス樣が自分でおつしやる樣にエホバの御子樣だから何んでもお出來になるのですよ。お前も大きくなつたらエス樣のやうに立派になるんですよ。勉強しなさいね」

と、靜かに物語りました。

（をはり）

北の國のわたり鳥

寒い北の國に渡り鳥の一家族が住んでゐました。暖かい南の方の國へ燕の一家族が歸つて行くと、まもなく、この渡り鳥の一家族は日本へ來ます。毎年、忘れずに日本に來ました。二羽の親鳥と可愛いらしい子鳥の外に、年をとつたお婆さん鳥との四つが、仲よく、くらしてゐました。

「お婆さん、もう、幾つねると日本と云ふお國へ行くの」

「そんなに早く行きたいのかい」

「ええ、だつて、私は生れてから初めて日本へ行くのですもの」
「日本はよい國だよ。親切な國だよ。可愛い子供達のゐる國だよ」
「だから、早く行きたいのよ」
お婆さんの鳥に頭をなでられてゐた子鳥は、日本へ飛んで行く日を指折り數へて待つてゐました。
夢にまで見て待つてゐました。
「もう、お前の羽根も強くなつたやうだ。日本までは仲々遠い。毎日毎日、飛んでゐなければならないのだ。少しだつて、羽根の休める時はないのだよ」
「お父さん、僕きつと飛べるよ。けれど、海が恐ろしい」

「なに、心配することはない。お父さんがお前の先に立つて飛ぶ。お母さんはお前の後を飛んでいらつしやるのだ」

「うれしいな」

親鳥は子鳥と愉快さうに話しながら、日本へ飛んで來る用意をしてゐました。

遂にその日が來ました。

お婆さんの鳥は兩方の手で、可愛い子鳥を抱きしめました。

「さあ、元氣よく飛んで行くのですよ。しつかり飛ぶのですよ。お婆さんはお前の歸つて來るのを、來年までここで待つてゐます。お婆さんはお前にお願ひがある。來年ここへ歸へて來る時、たつ

た一つでよいから、わたしの悦ぶ、おみやげを持つて歸つてくるのですよ」

「ええ。わかりました」

「しつかり行つておいで」

「お婆さん左樣なら」

「御氣嫌よう」

父鳥の後を一生懸命に子鳥は飛びました。

三羽の渡り鳥は懷しい日本の空をめがけて、毎日、海の上を飛んでゐました。

あと一日飛べば樂しい日本へ着くと云ふ日に、恐ろしい不幸が

やつて來ました。

その時まで蒼々と澄み渡つてゐた晩秋の空が、急に、曇り始めました。

「さあ、大變な事になつた、けれど何にも恐れることはない、しつかりお父さんのあとをついておいで、元氣を出すんだよ」と、親鳥は子鳥をはげましてゐましたが、最早その時は激しい暴風雨が眼の前におしよせてゐました。

三羽の渡り鳥は一生懸命に飛びましたが、この恐ろしい暴風雨に勝てさうにもありませんでした。

あらしのために子鳥はともすれば、さらはれて行きさうになり

ました。

「あれ、お父さん」

「しつかりおしよ。お父さんにつかまつておいで。こはくはないよ」

三羽の渡り鳥は一つになつて嵐の中をきりぬけました。力のつゞく限り飛んでゐました。夢中になつて飛びました。恐ろしかつた夜がほのぼのと白くなつて來ました。次第に夜が明けて來たのです。

激しかつたあらしは何處かへいつてしまひました。

二羽の渡り鳥は或る海岸の砂の上へ吹きつけられました。

子鳥は冷えきつた親鳥にとりすがつてしく〳〵泣いてゐました。

「ああ、困つたことになつた。折角、日本へ來ても私の一番大切なお父さんは、死んでしまつた。

私も足が痛くて少しも歩けない。羽根が弱つて飛べない。どうしたらいいのだらう」

母鳥と子鳥とはしつかり抱きあつて、顫へてゐました。

その時、可愛い少年が來ました。少年は砂の上に仆れてゐる憐れな二羽の渡り鳥をみつけました。

「まあ、可哀想に。きつと遠い處から飛んで來たのだ。昨夜のあ

らして疲れて飛べないのだな」

と云つて少年は母鳥と子鳥とを大切に懷にしまつて、家に戻りました。そして、親切にそだててやりました。毎日可愛いがりました。

暖かい春が來ました。

「さあ、春が來たからお歸り。寒い北の國へ行くがよい。又、秋になつたら元氣よく飛んでおいで。僕は、忘れずに待つてゐるよ。勇氣を出して飛ぶがいい」

少年は籠から取り出してやりました。

大きくなつた子鳥は親鳥と一緒に少年の家から、遠い北の國へ戻つて行きました。

「お婆さん、僕は何にもおみやげを持つて來ないがね、日本の少年に可愛がつてもらつたことが御土產ですよ」と物語りました。

夏の海

樂しい夏のお休み――海岸は賑であつた。海にはいつて泳ぐ者、白い砂濱を走る者、相撲をとる者。どこもここも元氣さうだつた。

お咲の家の離座敷は貸別莊になつてゐた。夏になると、毎年都からお客が來て泊つた。お客といふのは、久子一家の人々であつた。

「もう、久子さんがいらつしやる頃だ」

お咲は濱に咲いた月見草の花を眺めながら、そんな獨語を洩ら

した。夏が來るこ、お咲こ久子こは姉妹のやうに遊ぶのであつた。それも一ケ月ほごではあつたが、その樂しい時が、お咲には待たれた。

都から來る人々の姿が、海岸の松林の間などに見えるこ、お咲は思ひ出したやうに停車場へ驅けて行くこごさへあつた。嬉しさうに降りて來る都の人々の間に、久子らしい姿がありはしないかこ胸をごらすここさへあつた。

お咲は毎日のやうに久子を待つてゐた。夢を見るここさへあつた。

けれご——今年はわたしが病氣だから行けません。ほんこに殘

念です。來年の夏まで待つててくださいね――といふ、久子からの手紙を讀んだ時、お咲はわけもなく涙ぐんだ。

「病氣だつていいぢやないの。なぜ來てくださらないの」お咲は悲しかつた。急につまらなくなつた。濱へ行つて遊ぶことさへ嫌になつた。

「お咲、そんなに悲しいのかい」

と、お母さんから訊ねられた時、お咲は羞しさうにうなだれてゐた。

間もなく、裏の貸別莊へ都から泊りに來た。それは初めてお咲の家へ來た清子の一家族であつた。

お咲の家は俄に騷々しくなつた。清子達の笑ひ聲が朝から夜遲くまで、絶えまなく續いた。

お咲もその笑ひ聲を聽くと、次第に元氣づいて行つた。お咲は都から來た清子と遊びたかつた。「清子さん、お遊びしませうよ」お咲は裏庭を通つて、別莊の庭へとはいつて行つた。

「あら、今、來ちやいけないことよ」

清子の冷たい言葉が、ヒヤリとお咲の胸にしみた。お咲は悲しくなつた。そつと、足音を立てないやうに戻つて來た。

「漁師の娘のくせに………」

かういつた笑ひ聲が別莊の方から聽えて來た。それを聽いたお

咲は口惜かつた。思はず袖を顔に押しあてた。そして聲をひそめながら泣いた。

陽が暮れるころまで、塀の處に立つてゐた。

「あゝ人を憎んぢやいけないいんだ。きつと、わたしの眞心がたりないんだ。聖書には、人を憎んではいけない。敵でさへ可愛いがらねばいけないと、書いてあつた。昨日の朝も、教會で先生が教へてくださつた。わたしがたりないんだ。神樣赦してください」

お咲は祈るやうに獨語を洩らした。お咲の村には、小さい教會堂があつた。日曜ごとに、日曜學校が開かれた。お咲は熱心な生徒の一人だつた。

俄にあたりが騒がしくなつた。お咲は驚いて表に出て見た。人々は濱の處で、沖を指差しながら喚いてゐた。

「なんだらう……」と不思議さうにみつめてゐる處へ、お母さんが息を切らしながら戻つて來た、

「お咲、大變だよ。清子さんが海の中でみえねえんだ」

お咲はびつくりした。直ぐ濱邊へ走つて行つた。風が烈しく吹いて、海が荒れてゐた。陽は沈みかけてゐた。

清子一家の人々は眞蒼な顔をしてふるへてゐた。

「わたしが、助けてあげよう」

かうつぶやいたお咲は、勢よく海の中へ飛び込んだ。人々は驚

いた。助け船はすぐ跡をおつた。

清子はお咲に助けられた。お咲は自分の肌を清子に押しあてゝ、清子を溫めた。一生懸命に介抱した。心をこめて心配した。

清子は息をふきかへした。

「お咲ちやん、赦してくださいね。わたしが惡いんです」

お咲の手の上には、清子の熱い涙がこぼれた。清子は顏を上げようともしなかつた。

お咲は嬉しかつた。急に明るい心地になつた。

次の日から、お咲と清子の姿が海岸に見られた。二人は形と影のやうに、少しも離れなかつた。

日曜學校へも清子を連れて行つた。一緒になつて、讃美歌を歌つた。お祈りをした。聖書を讀んだ。

夏の海は、お咲にも清子にも樂しかつた。

（終）

Printed in Japan

昭和三年十二月十五日印刷
昭和三年十二月十八日發行

定價金三十五錢

不許複製

著者　大崎治部

發行者　東京市小石川區表町五六
エス・エイチ・ウエンライト

印刷者　東京市京橋區瀧山町五
渡邊吉郎

印刷所　東京市京橋區瀧山町五
中心堂印刷部

發行所　東京市京橋區銀座四丁目一番地
教文館出版部

發賣所　東京市京橋區銀座四丁目一番地
東京澁谷町上通り一丁目十三番地
京都市河原町通り丸太町上ル
教文館


COLUMBIA LIBRARIES OFFSITE
CU90065441



1928